



2017年5月24日放送

領域別入門漢方医学シリーズ

透析療法と漢方医学

日本鋼管福山病院 透析センター長 和田 健太郎

(6)透析療法における漢方薬の実際 疾患症状別の漢方治療

6回にわたり、透析療法における漢方薬のお話をしてきました。本日は、シリーズの最終回になりますが、透析患者さんのさまざまな疾患・症状に応じた処方例として、末梢循環不全、冷え症（冷感）からお話していきます。

(10) 透析患者の末梢循環不全・冷え症（冷感）

末梢循環不全、冷え症（冷感）は西洋医学的に治療の困難な訴えですが、漢方医学による治療法が奏効することもあります。むしろ漢方の得意分野といったところでしょうか。

透析患者さんも冷え症を認める機会が多いです。西洋医学的にはビタミンEなどが処方されることもありますが、著効する症例は少ないように思われます。冷感が多く見られるのは腰から下肢にかけてです。漢方医学的には、瘀血症状を伴っていれば桂枝茯苓丸や当帰芍薬散、温経湯が適応になります。鼠径部付近の圧痛や凍瘡を伴う症例には当帰四逆加呉茱萸生姜湯が適応になります。中高年者などで下肢の脱力感、冷感、臍下不仁を認めるものには八味地黄丸や牛車腎気丸が適応になります。全身の体力の低下も伴う冷感に対しては補中益気湯や十全大補湯などが適応になります。

また、実際の透析診療の現場では、冷え性に加えて、実際の平熱が低い低体温症の方も多

くみられます。このような症例に対しても漢方薬の効果が期待できるかもしれません。

(1 1) 透析患者の内分泌疾患

次に内分泌疾患についてです。まずは糖尿病です。現在わが国では、新規透析導入患者数のうち、糖尿病性腎症による透析導入数の占める割合が最も多くなっています。不幸にして糖尿病性腎症から透析導入に至った後も、血糖値のコントロールをできるだけ安定化させることが、血管障害などの生命予後を左右する合併症の進展を抑制させる点からも、重要とされています。しかし、糖尿病の治療は漢方単独では困難です。まずは食事・運動療法、インスリンや血糖降下薬などの薬物療法を行います。漢方薬は糖尿病に合併する症状の改善に有効なことが多いので、前述の西洋医学による薬物療法を行い、血糖値を改善させたいうで行うべきです。本来、漢方療法は全身の治療であり、糖尿病の症状は多種多彩であることから、各症状にあわせて処方を変えていくべきと考えます。

糖尿病とその合併症に対する漢方処方例。これらは地黄、山茱萸、茯苓、人参、蒼朮、白朮、麦門冬、桔梗、知母、牡丹皮、麻子仁など、血糖降下作用を有するとされる生薬を含んでいます。

インスリン療法においても血糖値の改善が不十分な場合、インスリン使用量の減量が可能になることもあり、喉の渇きが強いときには白虎加人参湯を用いたり、あるいは麦門冬湯に八味地黄丸や六味丸、牛車腎気丸を足すことで幅広く使えますし、補中益気湯や十全大補湯を処方したりします。糖尿病性神経症による起立性低血圧には五苓散、下肢のしびれや冷え、歩行障害を認めるものには八味地黄丸や牛車腎気丸を処方します。

(1 2) 透析患者の泌尿器科疾患

次に泌尿器科疾患についてです。

血尿

透析患者に血尿を認めた場合は、尿路結石や腎癌の合併の可能性も考えて、泌尿器科専門医にコンサルト、CTや膀胱鏡などの検査を行うことも検討しなければいけません。多発性嚢胞腎の患者さんの場合は嚢胞内出血の合併も考えなければいけません。これらが否定された無症候性血尿の場合は、猪苓湯や芍帰膠艾湯を処方します。結石による疼痛に対しては芍薬甘草湯が適応となります。

尿道炎

透析患者では特に透析歴が長くなるにつれて無尿またはそれに近い状態となることが多くなります。そして、抗菌薬の尿中への移行性が悪いことから、尿路感染症を合併した際、抗菌薬の効果が十分期待できません。そこで、漢方薬の併用が有効なこともあります。

症状により分類した処方例としては、血尿があつて、頻尿、排尿痛を訴えるものには猪苓湯、外陰部搔痒感、帯下の増加を訴えるものには竜胆瀉肝湯、神経質な性格が背景にあるものには清心蓮子飲があります。

浮腫

透析患者では塩分・水分摂取不良や心不全の合併などにより、しばしば浮腫（むくみ）を認めることがあります。浮腫に対しては、防己黄耆湯を使用することが多いですが、浮腫に口渇感を伴う場合は（透析患者ではこちらの訴えの方が強いと思われませんが）五苓散を処方します。発汗を伴う患者さんには越婢加朮湯を用いることもあります。

（13）透析患者の皮膚科疾患

最後に皮膚疾患についてお話します。透析患者では皮膚症状を訴えるものが少なくありません。ある統計調査によると、皮膚の掻痒感（かゆみ）は60～80%の患者さんに認められ、その約50%は全身性・持続性の掻痒感を訴えたとしています。特に透析患者における皮膚掻痒症は頑固で、時として難治性です。長期にわたる掻痒感（かゆみ）は身体的な苦痛だけでなく、精神的にも大きな影響を及ぼすことがあります。掻痒症（かゆみ）は一般的な皮膚科治療に抵抗性であることが多く、有効な治療法は確立されていないのが現状です。漢方はこのような皮膚症状に対しても有効なものが多数報告されているので、投与を試みる価値があると思われれます。

湿疹を認めない皮膚掻痒症

透析患者に比較的多く認められる掻痒感（かゆみ）がこれに該当します。原因としては腎不全による掻痒誘発物質の蓄積、カルシウム・リンの異所性石灰化、副甲状腺ホルモンの影響、皮膚の乾燥などが考えられていますが、不明なものが多いです。

温清飲、当帰飲子に含まれる四物湯の構成生薬（当帰、芍薬、川芎、地黄）には、すべて鎮静・鎮痙作用があり、他の4つの生薬（黄連、黄芩、黄柏、山梔子）とうまく作用して、止痒効果があるとされています。

また、透析患者の掻痒症に対する温清飲の研究報告によると、治療抵抗性の皮膚掻痒症を呈する維持透析患者10例に対し、温清飲エキス1日あたり7.5gを分3で9週間投与し、全身を36の部位に分け、掻痒部位の出現頻度と掻痒感の程度を検討されています。掻痒感の程度については6段階に掻痒スコアをつけています。その結果、部位別の掻痒スコア減少度は全体として10～20%で、掻痒出現頻度が高い部位ほど、掻痒スコアの減少度も大きい傾向が示されたとのことでした。

湿疹を認める皮膚掻痒症

透析患者の中にはアトピー性皮膚炎様の掻痒を伴う湿疹（しっしん）（滲出液）を認めることがしばしばあります。漢方で治療を行う場合は、滲出液が多く熱感を伴う場合には消風散、化膿性病変を伴う場合は排膿散及湯です。易疲労感や下肢の冷感を訴え、寝汗、あせもを伴う場合には桂枝加黄耆湯、やや乾燥傾向の湿疹（特に高齢者の場合には）当帰飲子を処方します。

これまでお話してきましたように、透析患者さんが合併する疾患や訴える症状は多岐にわたります。患者さんの生活の質に寄与する管理も必要となっています。今回のお話が先生方の日常診療の一助になれば幸いです。